

評者

財務省主計局  
 廣光 俊昭

ピーター・シンガー 著

児玉 聡 訳  
 石川 涼子 訳



## 『あなたが救える命』

世界の貧困を終わらせるために今すぐできること』

勁草書房 2014年6月 定価2,500円(税抜)

パトリア・S・  
 チャーチランド 著  
 信原 幸弘 訳  
 樫 則章 訳  
 植原 亮 訳



## 『脳がつくる倫理』

科学と哲学から道徳の起源にせまる』

化学同人 2013年8月 定価2,800円(税抜)

シンガー 「助けないのは間違ったことか」:

シンガーは、功利主義の立場から実践上の課題に対し様々な提言をおこなってきた豪州出身の倫理学者である。シンガーの主張は、動物の権利の擁護をはじめ中絶や安楽死の問題など、常に論争的になってきた。『あなたが救える命』(The Life You Can Save, 2009) でシンガーが取り上げているのも、彼が長年論じてきた論点で、我々まずまずの生活を送っている先進国の住人に、貧しく特に絶対的貧困のもとで生命の危険にさらされている途上国の人々を助ける義務があるのかという問題である。シンガーの答えはもちろんyesである。シンガーはシンプルに議論を進めている。

前提1: 食料、住居、医療の不足から苦しむことや亡くなることは、悪いことである。

前提2: もしあなたが何か悪いことが生じるのを防ぐことができ、しかもほぼ同じくらい重要ななにかを犠牲にすることなくそうすることができるのであれば、そのように行動しないことは間違っている。

前提3: あなたは援助団体に寄付することで、食料、住居、医療の不足からの痛みや死を防ぐことができ、しかも同じくらい重要ななにかを犠牲にすることもない。

結論: したがって、援助団体に寄付をしなければ、あなたは間違ったことをしている。

この論法でいくと、フォアグラを食べること(フォアグラは動物の権利の立場からも問題視される)は当然、我々自身の子どもをよい学校に送ることまでもが、そのぶん寄付にまわせる所得が減る以上、間違ったことをしていることになってしまう。こうした主張に対し、世銀エコノミストの経歴を持つポール・コリアーは「不安を覚える」とし、他の者が寄付をしないのに自分だけが多額の寄付をすることになれば、自分はばかをみることになるのであり、この集合的行動の問題の解決のために税と政府による海外援助があるのだという。貧しい人々への支援が国境を越えて広がりにくいことを道徳的に非難することは「誤り」

であり、国を構成する他者を気遣うことは「貴重な資産」であると述べる。シンガーがこうした批判にたじろぐことはないだろう。溺れそうになっている子どもが多数おり、助けられる立場にいる大人たちも多数いる状況下で、たとえ他の大人たちが助命に動かないとしても、自分の責務は子どもの中の一人を救うことだけで果たされ、あとの子どものことは知らぬとはいえないという。

本書の魅力はこうした議論のシンプルシティによる強みにとどまらない。「助けないのは間違ったことだ」という答えの倫理上の頑健性を強調する傍らでシンガーは、この答えが「人間の本性」からみて厳しすぎることを認める。人間は被害者が特定の誰かとして特定できないときには、さほど助ける気にならないし、身内をひいきする傾向がある。誰か他の者も手を差し伸べられる立場にあるのなら、あえて自らは助けに動かずに済ませようとする。シンガーはこれらの心理的傾向が人類進化上の基盤を有することを示唆する。この認識に基づいて、シンガーが提案するのは「寄付する文化を作り出すこと」、いわば社会のデザインに乗り出すことであり、その際に存分に活用されるのが「人間の本性」についての知見である。被害者が特定されないと助ける気が起きないのなら、被害者の顔がみえるようにすればよい。寄付をしたい人々が集まって励ましあう仕組みを立ち上げるのもよいし、寄付を公にすることで寄付を称揚し合う環境を作り出すのもよい。シンガーは行動経済学のナッジの考えにも言及し、従業員がオプトアウトしない限り採用時に自動的に寄付プログラムに参加させる仕掛けも有用であるとする。

チャーチランドー道徳的行動の神経基盤:

チャーチランドは心の哲学を専門とするカナダ出身の哲学者である。心の哲学とは、心、意識と物理的存在(特に脳)との関係を考察する学問であり、訳者(信原教授)のあとがきによれば、彼女の場合、消去的唯物論という、人間行動の説明はやがて完全に脳の状態による説明によって取っ

て代わられるという説を唱えているという。

『脳がつくる倫理』(Braintrust. 2011)で、チャーチランドが取り組んでいるのは「道徳の自然化」、すなわち道徳的行動の神経基盤を明らかにすることである。彼女によれば、道徳の基盤には個体に自分の幸せを図るようにさせてきた神経組織の変化があり、その変化が他者の幸せという新しい価値をも大切にするようにさせているという。そして、この他者への気遣いを可能にするネットワークに中心に位置するのが、オキシトシンなどのホルモンだという。オキシトシンとは母乳の分泌などメス特有のホルモンと考えられてきたものだが、近年、他者への信頼、社会行動に関わることが明らかにされてきている。プレーリーハタネズミとモンテインハタネズミは近接種であり、前者が家族の強い絆を持つのにに対し、後者の家族関係は希薄であるのだが、その背景には両種の間にもみられる脳内のオキシトシン受容体の数の違いがあるらしい。人間にオキシトシンを点鼻してゲームに参加させると、相手プレイヤーへの信頼感が高まるという実験結果も紹介している。

こうした観察に基づき、本書は第4章までで、「社会性に必要な条件は、脳のホメオスタシスの感情と、各人のホメオスタシス領域が子孫、血縁者、仲間へと拡張することに依存している。また社会性は、模倣や試行錯誤、条件づけ、教示に基づく脳の学習能力にも依存している」と結論付けている。すなわち、自ずと気遣わずにいられない対象の拡大を支える神経基盤が育ち、同時に学習を通じてその基盤の機能が開発されていくというわけである。ここに我々は、利他的でありつつもなお身内びいきを引きずるシンガーのいう「人間の本性」の基盤を瞥見したことになる。

では、「助けないのは間違ったことだ」とは、なにを意味しているのか：

ただし、以上は話の半分である。第5章以降、チャーチランドの議論の基調は大きく変化する。「道徳の消去」を目前に本書は急旋回をみせるのである。以降主張されるのは、「(道徳的行動の神経)基盤は基盤にすぎない。人間の道徳的価値はけっしてそれに尽きるわけではない」ことである。たとえ生得的な道徳基盤が存在するとしても、道徳が生得的であるとの説(道徳生得説)が正しいことにはならないということを示そうとするのである。具体的には、①人間の脳に生得的な「道徳器官」が存在するという説、②文化普遍的な5つの道徳に関わる根本的直観があり、それらの直観には自然選択上の基礎があるとする説が祖

上にあげられ、これらに対しチャーチランドは、遺伝子と表現型の関係が一对一の単純なものではないことや、普遍的に道徳行動が観察されるとしても、その普遍性が生得的な脳内モジュールに起因するとは限らないことなどを挙げて批判する。

注意しなければならないのは、これらの批判がもっともらしく聞こえるとしても、道徳生得説の息の根を完全に止めているわけではないことである。道徳行動に多数の遺伝子、脳内部位、学習が複雑に絡み合っていることが事実だとしても、その複雑性を指摘したことでもって道徳生得説の反証が完成するわけではない。道徳生得説は作業仮説として依然有用でありうるし、今後の研究により道徳生得説を支持するhard factsが見出される可能性もある。

道徳的価値が神経基盤には尽くせないというテーゼを掲げるのなら、チャーチランドはより端的な道を取ることもできたのではないか。シンガーに倣うのである。シンガーは多額の寄付を求めることが人間本性からみて厳しすぎることを認めつつも、本性にそぐわないとして寄付を拒む者がいれば、その者は、何をなすべきか自由に決定できるという意味での人としての「本来性」を欠くことになる」と指摘する。人間の人間たる所以は本性からも自由であることにある。シンガーの別の著作から言葉を借りれば、「倫理判断を下すさいには人は自分自身の好き嫌いを越えるということであ」って、「倫理規準に従って生きるという観念は生き方を擁護するという観念、生き方のための理由づけをするという観念、ひいては生き方を正当化するという観念と結びついている」のである。ひとたび倫理的思考に入れば、不偏的に人を扱うべしというロジックを振り払うことが我々にはできないのであり、このことが神経基盤に尽くされない道徳的価値の少なくともひとつの基礎なのではないのか。倫理のロジックのうちにある限り、「助けないのは間違ったことだ」ということは自明の理だということである。倫理的とばかりとは限らないこの世界で、このロジックの持つ力は大きなものではないかもしれないが、moral law within meとして我々を導くなかで、この世界の様子を幾分は異なったものにすることは必ずである。

(参考文献)

P. Collier. *A New Alms Race to Help the World's Poor*. 2009.

植原亮『チャーチランドの道徳生得説批判』(2014年)(生得説批判の問題点を分かりやすく論じている)

シンガー『実践の倫理』(第1版)(1991年、原著1979年)